ZOSHIGAYA MISSIONARY HOUSE MUSEUM

雑司が谷旧宣教師館だより

第59号
2017年3月31日

豊島区立雑司が谷旧宣教師館
〒171-0031 東京都豊島区雑司が谷 1-25-5 TEL/FAX 03−3985−4081

リニューアルオープン記念イベント2

～連続講座を開催しました！～

雑司が谷旧宣教師館は、2015年10月から翌年3月まで、5年に一度の大規模修繕と開館以来約30年ぶりの展示替えのために休館しましたが、2016年4月以降は、このリニューアルオープン記念として様々なイベントを開催しました。今回のリニューアルでは、旧宣教師館の1階部分の展示構成を変更し、また展示台に可動性を持たせることによって空間を広く活用できるようにしました。

2016年秋、春の大塚～雑司が谷の歴史的建造物を巡るウォーキングに続く第2弾として、10月30日～11月13日までの毎週日曜日・連続3回の歴史講座を開催しました。

10月30日「信仰空間としての雑司ヶ谷」 講師：永村 眞氏（金沢文庫長／日本女子大学名誉教授）

11月6日「建築史から見た雑司が谷旧宣教師館」講師：木下和也氏（豊島区立郷土資料館 生涯学習指導員）

11月13日「教育紙芝居の成立と豊島」 講師：浅岡靖央氏（白百合女子大学教授）

本連続講座は、「雑司ヶ谷」と「旧宣教師館」をテーマとして企画しました。永村報告「信仰空間としての雑司ヶ谷」は、雑司ヶ谷鬼子母神堂の国指定重要文化財の指定に関わられた永村眞氏をお招きし、江戸時代の雑司ヶ谷の空間的特徴などをご講演いただきました。続いて、木下報告「建築史から見た雑司が谷旧宣教師館」では、リニューアルした旧宣教師館の歴史的・建築史的みどころを解説し、浅岡報告「教育紙芝居の成立と豊島」では、児童文学の発展した雑司ヶ谷地域と教育紙芝居の関係についてご講演いただきました。

旧宣教師館を活用した講座の開催は、今年度が初めての試みでしたが、2017年度も継続して行う予定です。約110年前にアメリカ人宣教師の住宅として建てられた旧宣教師館は、建築当時の構造をほぼ保って保存維持されています。秋のひととき、近代木造洋風建築の瀟洒（しょうしゃ）な空間のなかで、「雑司ヶ谷」の歴史に触れてみませんか。

※昭和41年（1966）の住居表示実施において、「雑司ヶ谷」はその地域を狭め、現在の「雑司が谷」と変更されました。

永村眞氏「信仰空間としての雑司ヶ谷」

木下和也氏
「建築史から見た雑司が谷旧宣教師館」

浅岡靖央氏「教育紙芝居の成立と豊島」

マッケーレブのまいた「タネ」

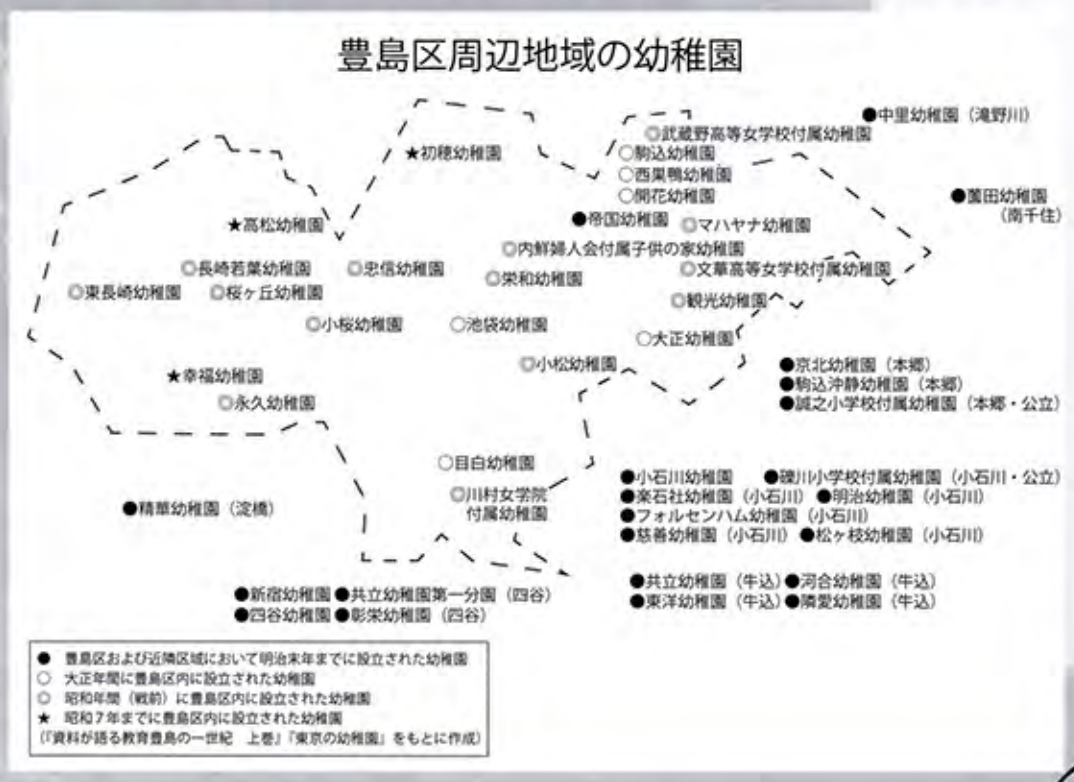
春になると、町のあちこちに新入生や新入社員の姿を見ることができます。特に、つい先日まで幼稚園や保育園にいた子どもたちが、小さな体に不釣り合いなカバンを持って歩く姿はほほえましく、幼かった頃を思いだす人もいるのではないでしょうか。

旧宣教師館の主であるマッケーレブも、幼稚園や学校などの教育事業には縁が深い人物です。昭和 3 年（1928）以降、マッケーレブは幼児教育のため雑司ヶ谷幼稚園の運営に関わりますが、それ以前には、青年教育のための雑司ヶ谷学院という学校を運営していました。学院には近隣の早稲田大学などの学生が住み込んでキリスト教や西洋文化の勉強をしていましたが、大正 12 年（1923）の関東大震災によって学院が半壊したことから閉校しています。それは、厳格なピューリタンであったマッケーレブの教えを、青年たちに徹底することが困難であったためともいわれています。では、マッケーレブが教育対象を子どもに移したのは、幼いころから教育すれば徹底できると考えたからでしょうか。

今では、多くの子どもたちが、小学校へ就学する前に幼稚園や保育園などに通っています。けれども、マッケーレブが来日した明治という時代では、幼稚園に通う子どもは多くはありませんでした。

当時の日本は、急速に近代国家へと脱皮を志向した時代でした。子どもは近代国家の横成員と考えられるようになり、その人員育成の一環として小学校の普及に力が注がれます。全国民が小学校に就学することが目指され、明治 5 年（1872）制定の「学制」では、小学校の性格と区分などが規定され、小学校就学前の 6 歳までの男女については、「幼稚小学」として小学校の一部とされました。日本で最初の幼稚園は、明治 9 年に設立された東京女子師範学校付属幼稚園です。当時、世界的に幼児教育の普及は遅れており、日本でも小学校の普及と就学率の向上に力が注がれ、幼児教育については取り残された状況にあるなかで、この開設は画期的でした。けれども、この頃、幼稚園は全国的にも多くはありませんでした。それは、子どもを教育する保姆の資格が小学校教員の資格に付随していたために専門的養成が確立されなかったこと、また、女性に限られており [1]、保姆の社会的地位が低かったために人材確保が難しかったことなどがその理由にありますが、なによりも当時の子どもを取り巻く環境にあったといえます。

明治時代、東京には仕事や生活の安定を求めて様々な人々が流入しました。しかし、その多くは安定的収入を得られなかったために生活が苦しく、その結果、多くの貧困者を生み出し、大都市には大きな生活格差が生じることになります。こうした環境にあって、幼いうちは働く親に代わって弟妹の世話をし、7 ～ 8 歳になると奉公や工場などで働く子どもも多く、鮫河橋スラムの様子を記した横山源之助は、最低限の教育も受けられない子どもたちの将来を危惧しています [2]。また当時の社会的認識としても、子どもを労働力と考える傾向が根強く残っていたのです。それは明治 6 年の小学校就学率が全国平均約 28% と低いことからも窺え [3]、幼稚園へ通っていたのは、授業料を納める余裕があって子どもを労働力と期待しない、上流家庭の子どもたちであったのです。



こうした幼児教育環境に改善を促したのは宣教師たちでした。彼らは貧困者の集落であるスラムに率先して入り、伝道の傍ら、慈善学校や保育活動を行います。鮫河橋には、明治 20 年代後半以降、マッケーレブと仲間の女

性宣教師であるアリス・ミラーやワイリックが、またアメリカン・ボードの女性宣教師デントンが活動しています。明治 39 年、鮫河橋に、貧困家庭児の保育を目的として二葉幼稚園が移転開設されますが、彼ら女性宣教師たちは、二葉幼稚園園長の徳永恕やデントンなどと協力して貧困家庭児の保育活動にあたったといわれます [4]。

幼稚園に関しては、明治 32 年の「幼稚園保育及設備規程」によってその目的や保育内容が規定されたことで、その数が急増します。保姆不足を補うために官民双方からの育成が図られますが、その育成に多大な貢献をしたのがキリスト教系養成機関でした。幼稚園独自の法令は大正 15 年「幼稚園令」制定によりますが、特に大正時代になると、増加してきた中流家庭が子どもの育成に関心を持ったこと、子どもの特性を「小さな大人」ではなく「子どもらしさ」に求めるようになったことなどから、飛躍的に幼稚園が増設されていきます。けれども、その多くは私立の幼稚園であり、認可を得ていない社会事業施設も設立されていきました。図（P2 右下）からは、豊島区域においては明治 45 年に認可を受けた帝国幼稚園まで幼稚園の開設はなく、大正～昭和初期にかけて増加していく傾向が窺えます。このように、明治以降の幼児教育に、アリス・ミラーやデントンなどの「名もなき」宣教師たちは大きな役割を果たしたといえるでしょう。

さて、当館主人のマッケーレブの邸内敷地にも幼稚園がありました。マッケーレブの仲間の女性宣教師リリー・サイパートが、大正 13 年 9 月に開設した雑司ヶ谷幼稚園です。費用の調達など、かなり苦しいなかで、同 15 年には、廃校となっていた雑司ヶ谷学院を活用して保姆養育のための女子訓練校も開校しました。雑司ヶ谷幼稚園は、当初はサイパートによる運営で、マッケーレブ自身は雑司ヶ谷教会の日曜学校を担当していたようです。しかし、昭和 3 年、寮母との関係悪化から女子訓練校を閉鎖し、サイパートは吉祥寺に拠点を移し、雑司ヶ谷を去ります。この後、サイパートに代わり雑司ヶ谷幼稚園の運営を担ったのが、マッケーレブです。当時の園児数は 30 名、村田伝道師監督の下に保姆有田氏が２名の助手とともに活動していました [5]。

雑司ヶ谷幼稚園の活動については、保育期間は 2 年間で、卒園時には卒業証書が渡されました [6]。マッケーレブ自身が教会活動として「(昭和 3 年) 10 月 27 日に当教会幼稚園の運動会を催しました。多数の人々が幼い子等の遊びを心より喜んで見物してゐました [7]」と報告しており、運動会なども行われていたようです。また、聞き取り調査からは、「(雑司ヶ谷) 幼稚園を雑司ヶ谷では一般の家庭の為に開始しました。日曜学校には 7、80 名以上の子供が集っていました。西洋館の内の暖炉や電燈、すべてが珍しい物であり、子供達にとっては不思議な世界であったに違いありません [8]」と語られています。豊島区域は大正年間以降、住宅地＝ベットタウンとしての性格を強めており、新興の中流家庭も多く移り住んだと考えられます。また、加えて雑司ヶ谷地域は、文学や絵画など文化的活動に携わった人々も多く住んでおり、ここで語られる「一般の家庭」とは、こうした中流家族の子女を対象としたものと思われます。

マッケーレブが幼児教育に関わった理由、それは、当時の日本の社会状況に大きく影響されていましたが、来日時から目にしていた子どもたちの姿や、同志である女性宣教師たちの不断の努力によるものでもあったのです。

マッケーレブは昭和 16 年に帰国し、以後、日本の土を踏むことはありませんでした。けれども、彼のまいた「タネ」は、その教え子たちに受け継がれ、昭和 57 年、彼の住宅であった雑司が谷旧宣教師館の保存運動につながるのです。旧宣教師館は、今では東京都の指定文化財として一般公開され、多くの人々の訪れる場となっています。この成果は、マッケーレブが地域住民やその子どもたちへまいた「タネ」が芽吹き、咲かせた「花」であったといえるでしょう。

雑司ヶ谷幼稚園卒園式。最後列中央がリリー・サイパート。昭和 2 年（1927）　当館所蔵

（１）明治 23 年「小学校令」「幼稚園保姆ハ女子ニシテ小学校教員タルヘキ資格ヲ有スル者又ハ其他府県知事ノ免許ヲ得タルモノトス」
（２）横山源之助『日本の下層社会』（岩波文庫、1985 年）、松原岩五郎『最暗黒の東京』（講談社学術文庫、2015 年）
（３）明治 6 ～ 18 年にかけて就学率は上昇し、男子は約 40 ～ 65%、女子は約 15 ～ 30%となるが、全体的には約 28 ～ 50%に満たなかった。
（４）浜地真美子「地域福祉の基礎を築いた宣教師たち―アリス・ミラー―」（『生活と文化』第 16 号、2006 年）
（５）『道しるべ』1 号、1928 年
（６）当館所蔵資料より
（７）『道しるべ』6 号、1928 年
（８）『福音』27 号、1983 年、野村基之氏の聞き取りによる。

参考文献
湯川嘉津美『日本幼稚園成立史の研究』（風間書房、2001 年）
大岡紀理子「近代日本の幼稚園保姆養成とキリスト教との関係についての一考察」（『学術研究―人文科学・社会科学編―』第 60 号、2011 年）

旧宣教師館イベント報告

オータムコンサートを開催しました

2016 年 10 月 2 日の日曜日、旧宣教師館のウェスターンピアノとフルートによるサロンコンサートを開催しました。今回は、ウェスターンピアノとフルート・ピッコロ・オカリナなどとの協奏が行われました。曲目には多くの人の耳になじんでいる、ピアソラ「リベルタンゴ」やいずみたく「見上げてごらん夜の星を」などが演奏され、参加者はフルートやピッコロ、オカリナなどの様々な楽器の説明とともに、さわやかな音色に耳を傾けました。

旧宣教師館のコンサートで使用するウェスターンピアノは、日本で初めての国産ピアノを製造した西川楽器の西川安蔵によって製作されました。約 80 ～ 100 年前に製作された古いピアノということもあり、コンサートの前には、いつも専門の調律師の方に調律を依頼し、鍵盤や内部構造のメンテナンスを行っています。こうした専門の職人の方々によっても、旧宣教師館の活動は支えられているのです。

ワークショップを開催しました

「消しゴムはんこで楽しむクリスマスカードづくり」

2016 年 12 月 10 日の土曜日、旧宣教師館を活用したワークショップとして、「消しゴムはんこで楽しむクリスマスカードづくり」を開催しました。今回の参加者は小学校4年生以上を対象としたため、学校などで刃物を使い慣れた人、手を離れて久しい人など様々でした。初めはおそるおそるハンコに刃物を入れていた人も、時間が経つにつれて手慣れた手つきでハンコにデザインしていました。師走の昼下がり、講師の用意したデザインをもとに、時間を忘れてかわいらしいオリジナルカードを作成しました。

スプリングコンサートを開催します

うららかな春の日、旧宣教師館のウェスターンピアノとチェロの協奏を、歴史的建造物のなかで楽しんでみませんか？

日　時：2017 年 5 月 14 日（日）14：00 ～／場　所：旧宣教師館 1 階食堂ホール
演奏者：飯島奏人さん（ピトレ弦楽奏団代表：チェロ奏者）／米丸咲季子さん（ピアニスト）
曲　目：白鳥（サンサーンス作曲）／夢のあとに（フォーレ作曲）など

［文責　小山貴子（学芸研究員）］